

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

Al Vi Kara

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

N-ro 98, septembro 2009



S-ino MARKARIAN Kimie (maldekstra) lekciiis pri Mensa kalkulo (暗算) en la Kleriga Lundo de la 94a Universala Kongreso en Bjalistoko, la 27an de julio. Ŝin helpis s-ino TAHIRA Masako (dekstra) el nia societo. Fotis s-ro ARAI Toshinobu.

表紙の写真について

第94回世界エスペラント大会は7月25日～8月1日にビャウイストク（ポーランド）で開催されました。世界大会はいつも土曜日から翌週の土曜日の8日間の日程で、3日目の月曜日（7月27日）には Kleriga Lundo（教養の月曜日）が行われます。その中で、マルカリアン君枝さん（イギリス在住）が Mensa kalkulo per la sorobana metodo（珠算式暗算）の講義を行われ、本会の田平正子さんが助手として参加されました。大きな算盤は、頭の中に想像上の算盤を作ってもらうための説明に使用されました。

世界大会については、7ページ、26ページも参照してください。



Statuo de Zamenhof
en Bjalistoko, Pollando



Postsigno pri la naskiĝdomo de Zamenhof
Fotis s-ro Yamamoto Nihoe

京都エスペラント会・例会

毎週水曜日・午後7時から9時まで、エスペラント会館にて
有志の学習会

毎週月曜日・午前10時30分から12時まで、エスペラント会館にて
子連れ参加も歓迎

有志の研究会

毎週木曜日・午後7時～9時、エスペラント会館にて
有志の土曜日のおしゃべり会

毎週土曜日・午後2時～4時、京阪丹波橋駅西側の喫茶店「リーブル」
エスペラントで聖書を読む会

毎月第一月曜日・午後1時～4時、エスペラント会館にて
（次回は10月5日）

ENHAVO

Ni vigle agadas en Kioto ! (活動報告)

第 57 回関西エスペラント大会への参加 4 p

(1)相川さん：6日午前の「作文教室」の講師

(2)田平さん：6日夕方の「オークション」のセリ人

(3)森川さん・笹沼さん：7日午前の「大会小大学2」の講師

(4)相川さん：7日午後、K L E G 役員紹介

7月29日例会への外国からのお客様 7 p

第 94 回世界エスペラント大会への参加 7 p

9月2日例会への外国からのお客様 8 p

9月9日例会への外国からのお客様 9 p

京都府国際センターでの国際活動パネル展 10 p

エスペラント入門講座 11 p

京都新聞に国際活動パネル展の記事が掲載 11 p

今号のテーマ「私のエスペラント学習法」

山内 利朗 さん 12 p

相川 節子 さん 15 p

川越 幹 さん 16 p

森川 和徳 さん 17 p

後藤 美和 さん 17 p

ABZ kiel gastigi 連載(2) (田平 正子) 19 p

私とモンブランの万年筆 (光川 澄子) 22 p

パソコンソフト「パワーポイント」を使った教材を紹介します

(相川 節子) 24 p

Long-distanca ir-vojo al la 94-a UK okazinta en Bjalistoko

(Yamamoto Nihoe) 26 p

La reviviĝo de aŭto “DETROIT” en la alta tekniko en Kioto

(KAWAGOE Kan) 30 p

Ĝardeno kun ondoj (KAWAGOE Kan) 32 p

Ni vigle agadas en Kioto !

このコーナーは、京都エスペラント会の月刊の活動情報誌「事務局通信」(川越 幹さん編集) やブログ (http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/) の記事を元に、主な活動を紹介するものです。

第 57 回関西エスペラント大会への参加

La 57a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo

- ・日時 2009年6月6日(土)～7日(日)
- ・場所 高槻現代劇場(大阪府高槻市)
- ・参加者 211人(不在参加47人、欠席23人を含む)
京都エスペラント会および関係者の参加者(五十音順、敬称略)
相川節子、川越幹、後藤美和、笹沼一弘、田平正子、津田昌夫
浪川光代、成田和子、藤本達生、光川澄子、森川和徳

Kiotanoj aktivis en tiu ĉi kongreso (関西大会での京都會員の活躍)

- (1) S-ino Aikawa gvidis en “Kiel skribi en Esperanto”, atm. la 6an de junio.
相川さん：6日午前の「作文教室」の講師



相川さんはホワイトボードに書き込んでいる方です。

(2) S-ino Tahira aktive prezidis aŭkcion de esperantaj memoraĵoj vespere la 6an de junio.

田平正子さん：6日夕方の「オークション」のセリ人



田平さん（左）、助手の清水博子さん（右、宇治城陽）
撮影：堀田裕彦さん（枚方）

(3) S-roj Morikawa kaj Sasanuma lekciis en “Kongresa Universitateto 2”, atm. la 7an de junio

森川和徳さん・笹沼一弘さん：7日午前の「大会小大学2」の講師

Ĉu elektromagneta ondo el poŝtelefono estas danĝera? 森川
(携帯電話の電磁波は危険か)

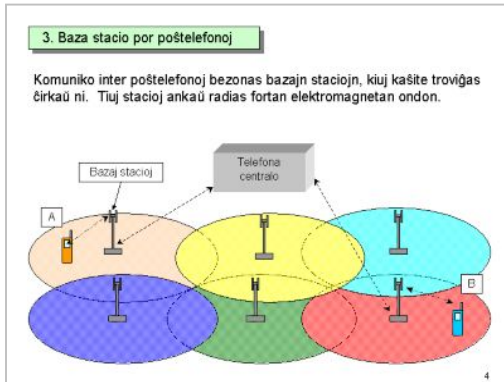
Nacia Instruprogramo kaj Reformo de Japana Edukado 笹沼
(学習指導要領と日本の教育改革)

Elektronika aparataro kaj ekologio (電子機器とエコロジー) 森川



森川さん（左） 笹沼さん（右） 撮影：堀田裕彦さん（枚方）

Ĉu elektromagneta ondo el poŝtelefono estas danĝera? のスライド



Estas tia tendenco ke SAR malgrandiĝas dank' al teknika progreso.

Novaj poŝtelefonoj flavas multajn antenojn per:

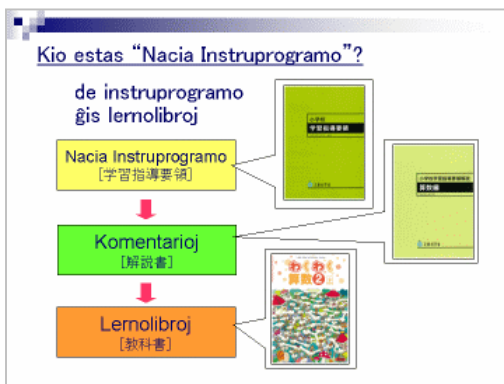
- (1) Unu-segmenta televido,
- (2) GPS (Tergloba Pozicio-detektaanta Sistemo),
- (3) IC-karto,
- (4) Bluetooth, Proksima radio-komunikilo.

Ekzemple, SAR de miaj poŝtelefonoj:

Antaŭa telefono 0.79 W/kg (2007) → Nova telefono 0.49 W/kg (2009)

10

Nacia Instruprogramo kaj Reformo de Japana Edukado のスライド



Tutlanda Ekzamano (2007-)

Pri matematiko kaj japana lingvo

- Problemoj A ⇒ **scioj**
- Problemoj B ⇒ **kapablo utiligi sciojn**

一葉さんの身長は 140 cm 也
 一葉さんより身長が 10 cm 高い人は何人いますか。
 一葉さんより身長が 10 cm 低い人は何人いますか。
 一葉さんより身長が 10 cm 高い人と低い人の合計は何人いますか。

(4) S-ino Aikawa estis prezentita kiel estrarano pri organiza fako de KLEG
 7日午後のKLEG（関西エスペラント連盟）役員の紹介。相川さんはKLEG
 組織部長として活動されます。



相川さんは右から 2 人目 撮影：堀田裕彦さん（枚方）

7月29日(水)例会への外国からのお客様

S-ro Franck Bourgeois, gasto el Francio partoprenis en nia regula kunveno. Li estas patro de du etaj infanoj. Ni aŭskultis pri lia familio kaj pri sociaj helpoj por gepatroj en Francio. (AIKAWA Setuko)

フランスからのお客さま、フランク・ブルジョアさんを迎えました。2児の父です。ご家族のことや、フランスの育児休暇制度のことなどを話してくださいました。



左から、森川、光川、川越、Franck、相川（敬称略）

第94回世界エスペラント大会への参加

La 94a Universala Kongreso de Esperanto

今年は、エスペラントの創始者ザメンホフ（Ludoviko Lazaro Zamenhof, 1859-1917）の生誕150周年です。これを記念して、第94回世界エスペラント大会がザメンホフが生まれたビャウイストク（ポーランド）で7月25日～8月1日に開催されました。

大会参加者は63カ国から1860人。日本からの参加者は176人。

京都エスペラント会からは、会員の家族を合わせて、6人が参加されました。

藤本達生さん、藤本ますみさん、田平 稔さん、田平正子さん

津田昌夫さん、山本鳩江さん

世界大会については、本誌の表紙、3ページ、26ページも参照してください。

ビャウイストク



9月2日(水)例会への外国からのお客様

La gasto estas d-ro Don(ald) Davis el Madison, Usono, specialisto de Sanskrito, Malajalama lingvo, Hinduismo ktp. Li nun partoprenas en Internacia Konferenco pri Sanskrito en Universitato Kioto, en kiu ĉeestas ĉirkaŭ 600 fakuloj el 40 landoj. La Konferenco okazas ne en Sanskrito, sed en la angla lingvo. Mem estante anglalingvano li sentas sin en malegaleco. Al Don mankas ŝanco paroli en Esperanto, kvankam li tre bone skribas kaj bele prononcas. Ne kredeblas, ke ĝis nun li povis renkontiĝi kun aliaj esperantistoj nur kvar fojojn. Li estas ankaŭ delegito de Universala Esperanto-Asocio. (TAHIRA Masako)

アメリカからのお客さま、ドン・デービス博士を迎えました。博士のご専門は、サンスクリット語、マラヤラマ語、ヒンズー教など。京都大学で開催されている国際サンスクリット会議に参加されています。ご自身の母国語が英語ですが、国際会議で英語を使うことの不平等を感じておられます。博士はエスペランティストと会うことは4回しかなかったとのことですが、きれいに発音されていました。



左から、川越、Don、田平、相川、中川、前川（敬称略）

9月9日(水)例会への外国からのお客様

S-ino Emilie (Emili) kaj s-ro Thibaud (Tibo) Leroux, gastoj el Francio, vizitis nian kunvenon. Ili geedziĝis en la lasta monato kaj vojaĝas en Japanio por geedziĝa memoro. Tibo lernas la japanan lingvon kaj scias eĉ kelkajn ĉinajn literojn.

フランスからの新婚のエミリとティボがお客さまです。ティボは日本語も勉強中です。9月12日の展示会にも参加していただきました。



9月9日の例会にて (敬称略)
前左から、中川、Tibo、Emili、川越、後左から、森川、田平、相川



9月12日の国際活動パネル展にて

京都府国際センターでの国際活動パネル展

Panela Ekspozicio pri Esperanto en Kioto-gubernia Internacia Centro

・日時 9月11日(金)～19日(土) 午前10時～午後6時

(最終日は午後4時まで)

・場所 京都府国際センター(京都駅ビル9階)府民交流サロン



撮影：川越 幹さん

エスペラント入門講座

Enkonduka Kurso de Esperanto en Kioto-gubernia Internacia Centro

- ・日時 9月12日(土) 午後2時～4時
- ・場所 京都府国際センター(京都駅ビル9階)会議室
- ・参加者 司会(川越)、講師(森川)を除き、4人。
- ・概要 スライド(Microsoft Powerpoint)による入門講座。雨が降ったためか、参加者が少なかったのが残念。

京都新聞に国際活動パネル展の記事が掲載

当会の国際活動パネル会(前ページ)が、9月15日(火)の京都新聞に紹介されました。25ページの真ん中に、横12cm、縦14cm(4段抜き)の大きさで、しかもカラー写真付きでした。前日(14日)11:30～12:00に京都新聞の記者が取材に来られ、田平さんが対応されました。記事の全文を下記に載せます。

新聞記事の最後の部分「中立な人間関係を築く活動として共通語を広めたい」という文章がありますが、田平さんはそのように言うておられません。田平さんは「中立的な言語で、対等・平等に付き合いたい」と言われたのを、記者の方が誤解されたのかと思われます。

エスペラントに興味を ポーランドの大会 下京でパネル展

国際共通語・エスペラント語を紹介する「エスペラント国際活動パネル展」が京都市下京区の京都駅ビル・京都府国際センターで開かれている。エスペラント語で交流する様子を収めた写真や、文法を説明したパネルなどに市民や観光客が見入っている。

京都エスペラント会が、世界各地で毎年開かれる「世界エスペラント大会」の報告活動として催した。今年はエスペラント語発案の地、ポーランドで開催された。63カ国から集まった人々がエスペラント語で討論や講習会を楽しむ写真や、エスペラント語の語順を解説したパネルなど約80点を展示している。

現在、エスペラント語の使用人口は100万人という。同会の田平正子さん(67)＝左京区＝は「中立な人間関係を築く活動として共通語を広めたい」と話していた。19日まで。

今号の特集テーマ

Kiel mi lernas Esperanton? 私のエスペラント学習法

編集部には原稿が届いた順番に載せています。

山内利朗さん(12頁) 相川節子さん(15頁) 川越 幹さん(16頁)
森川 和徳さん(17頁) 後藤 美和さん(17頁)

山内 利朗 さん

英語は「have + 過去分詞」が出てきてから、ずっと嫌いだ。「to + 不定詞」が出てきてからは更にキライになった。「イディオム」とかいう「組み合わせ呪文」のようなものを憶えねばならないらしいということは高校のときなんとなく分かったが、もう興味はなかった。英語がキライになると、わからなくなるのはだいたい比例していることは、中学の頃から体験済みである。

僕の弟は中学で英語の教師をしているので、「なんで英語を学ばねばならないと思うか」と質問したことがあるが、長い無視のあと「わからへん」というメールが来た。そのような彼の職業生活の根底を揺るがすような質問は、彼の人生では禁止されているのだろう。

あるいは、弟は人口の少ない県の中学で柔道部の顧問をしている(いた)のだが、女子柔道部員がいるため、忙しすぎて、そんなことを考えている余裕がなかったのかもしれない。というのは、女子の柔道部員は一校に一人いるかいないかの少なさだから、地区大会・県大会ですぐに優勝してしまうからである。地区大会では第一試合は相手が欠場のため不戦勝、第二試合はくんずほぐれつしているうちに判定勝ちして、それがその階級の優勝となる。そうすると次は県大会、全国大会ということになり、顧問の彼はやれ大阪だ東京だと子どもらを連れて出張することになるのだそうだ。

ところでちょっと自慢だが、僕は二十年ほど前、哲学系のある分野の英文をペラペラに読めたときがあった。すでに大学は卒業してちょっと「試験」を受けるのが目的だったそのときは、英語のペーパーバックを字引と突き合わせて調べた。もちろん日本語訳のある本である。知らない単語が出てくるたびに、名刺大の単語カードをつかって、オモテにはその単語を大きく書き、その四隅には反対語や派生語を書いた。裏にはその単語の意味と、それが使用されている文章をそのペーパーバックから抜き書きした。そんなカードを何百枚と作って何度もカードをめくって、その本に出てくる単語に精通した。それで半年くらいで、だいたい「その分野」の英文は読めるようになった。この手法は特定分野の専門書を読んで理解するという目的のためには、自分には有効だと分かった。ドイツ語でもだいたい同じような手法で特定の分野の簡単な文

章は読める気がするようになった。試験が終わって数年すると、写真が色あせるように英語もドイツ語も分からなくなった。とりあえず、その言語に接し続けなければ、その分野の能力は衰退していくのだろう。

じゃあ、エスペラントはどうか。僕も多くの人と同じく、エスペラントでメシを食っているわけでもないし、何か試験を受けるわけでもないし、読みたい「専門書」があるわけでもない。漢字や英語のようにテレビでエスペラントのクイズ番組をやっているわけでもない。毎日エスペラントに接する必要は何もないのである。どうするか。

インターネットで知り合った東京やポーランドやブラジルのエスペランティストたちは、みな「セカンドライフ」というバーチャル世界で自分の分身を作って、ヘッドホンとマイクでバビッているらしい。僕もそこへ行ってしゃべってみたが、どうも自分の分身（アバター）の動作がうまく行かないのと、そんな深夜に（ヨーロッパの人と逢うためには深夜から早朝にログインしなければならない）パソコンに話し掛けるのも、なかなか勇気と家人や近所の迷惑にならないような工夫とが必要だ。その上、そこに行ってみれば、自分にはそんな抽象的な世界で何かしゃべりたいことがあるわけじゃないってことに気づいてしまう。

今はどんな勉強をしているか。「勉強」というより、単にやっていることだが。僕もっぱらパソコンとインターネットでエスペラントをやっている。

その一つはブログである。恥ずかしながら、「ブログといふものを、初心者の僕もすなり」というわけだ。ほとんど日常的なことが、ニュースの紹介とか感想ばかりである。いずれにしても、書いてみようとか翻訳してみよう、という意欲が湧いてこないとはナシにはならない。

しかし、それも簡単なことではない。「宝くじ売り場の前を通るたびに、売り場のボックスの中の人や食事やトイレはどうしているんだろうか、百万円くらい当たる確率は何百万分の一くらいだろうな、とか思いつつ一度も買ったことがない。宝くじを千円買うより、安全で安売りの食品を見つける方が大切なのだ。」などという場面としてはありふれていても、文章としては奇怪なこの日本語をエスペラントに訳そうとすると、日エス・エス日両辞典を使ってもなかなかできるものではない。だから、このような文章は書かない。

もっと短かく「一日中子どもの相手をした」という文でも、「相手をする」というのがわからない。こういうときは、インターネットの翻訳機で英語を参考にしてみる。そしてその英語を lernu.net などのインターネット辞書でエスペラント訳してみる。ちなみに、英文では、*play*, *keep company*, *entertain* などが出てくる。

そうしてきっと間違いだらけの文章を書いているのだが、稀にしか間違いは指摘されない。

もちろん、書くばかりでなく、他のエスペラントで書かれたブログも閲覧するのだが、たいてい読む気がしないのは、字が小さくて、話が長いからである。そして僕も

他人の間違ひを見つけても一々指摘したりはしない。それは大変面倒くさいことなのである。明らかに対格の n が抜けまくっているものから、文字の順逆、脱字など様々だが、読んでわかればそれでよいし、読んでわからなければ、それ以上読もうという気がしない。ブログというものは、お互いそういうものなのだろう。ちなみに、外国の人が書いた文章はやっぱりわかりにくい。特にフランス人の書いたものは単語の意味がわかってても文章がわからないことがある。

もう一つの勉強は、エス日対訳文を「蒐集する」ことである。これをパソコンのデータベースに登録しておく。エス日対訳文のソースは対訳本、辞書の例文、そしてインターネットである。

今面白いと思っているのは、インターネットで公開されている埼玉大学の佐々木照央氏の芭蕉のエスペラント訳のエス日対訳データベース登録である。親切な注のついた芭蕉の著作もインターネットで閲覧できる。日本語の芭蕉を脚注といっしょに読んでみると、佐々木氏のエスペラント訳も巧みに本文に書かれていない説明など取り入れてエスペラント訳にしてあるのが面白いし、氏の日本の古典の造詣やうまい訳文に感心してしまう。

平和についての文章も興味深い。たとえば、広島市のホームページにはここ数年間の「平和宣言」が日本語と英語で掲載されているし、広島エスペラント会にはそのエスペラント訳が紹介されている。核兵器「廃絶」の訳語として、1999、2000、2001、2003、2004 年版は *neniigi*、2002 年の宣言には「廃絶」という言葉は使われておらず、「核兵器の絶対否定」*absoluta neado de nuklea armilo* とある。2005 年の宣言のエス訳では *nuligo* が採られ(別訳では 2003 年も)、2006 年には再び *neniigi*、2007 年は *eliminacio* (正しくは *elimini*) だけが用いられているが、これは広島市の英訳 *eliminate / elimination* に引きずられたものと思われる。2008 年は *abolicii*、*abolicio* だけが使われていて、これも広島市の英訳が *abolition*、*abolish* しか使わなかったことによる。じゃあ、*neniigi* の時代の英訳はどうだったかということ、2004 年なら *eliminate* である。それぞれをエス日辞書で調べると、どうもじっくりこない感じだ。ちなみに、同辞書の「核兵器」「廃絶」の用例では以下のものがあつた(もちろん辞書全体を網羅はしていない)。

Mi opinias, ke nukleaj armiloj estas forigendaj.
manifestacii por la nuligo de la nukleaj armiloj
Ni premisas abolicion de nukleaj armiloj, kaj diskutos sur tiu bazo.

核兵器は廃絶されるべきだと思う。

核兵器廃絶のためにデモ行進をする。

私たちは核兵器の廃絶を前提とし、その基盤に立って議論しよう。

広島平和宣言の当の秋葉市長自身が英語に堪能なはずだから、英訳も市長自身によるものかもしれない。2009年の「廃絶」には abolition, abolish と eliminate とが使われている。どんなエスペラント単語がふさわしいだろうか。

こうして、さまざまな対訳を蒐集して、随意に日本語を指定すると何例かのエスペラント文を瞬時に取り出せる。これは便利だし、そのデータをチマチマ集積していく過程がなんとなく、今の僕の勉強なのかなあ。

相川 節子 さん

以前何かのアンケートで、「あなたの役に立ったエスペラント学習法は？」と質問されたことがある。

その時の答えは、「一に読書、二に読書、三四がなくて五に合宿」だった。その意見は今も変わっていない。

英語の場合だと、英語の本は読めるが原稿は書けないとか、読めるが会話はできないとかいう人がけっこういる。でもエスペラントを学習している人をみると、エスペラントの本を一定量読んでいる人は、必ずある程度書けるし会話もできる。わたしにはその理由の説明はできないが、実感としてそう思う。

ここで「ある程度」というのは、実用に差し支えないレベル、たとえば手紙を書けば意味が相手にちゃんと伝わるとか、電話で打ち合わせをすれば誤解なく通じるとかいう意味である。どんなことばでも、実用上誤解なく使えればいいわけで、別に作文教室で百点をとる必要はない。(La Movado の作文教室を担当している者が言うのは矛盾かもしれないが)

わたしは学生時代から定年退職まで、電車とバスで通学・通勤していたから、それが読書の時間になった。もっとも、運良く座れたときはたいてい寝たから、読むのは吊り革につかまって立ったままというスタイルで、はた目にはあまり格好のいいものではなかったかもしれない。

わたしの場合、本を読むのはエスペラント文に慣れることが目的である。いろいろなエス文を読んで、エスペラントの感覚を身につけておくと、自分が書く時、まちがった言い方かどうか、カンでほぼわかる。日本語使用者なら、漢字を書きながら、「あれ、おかしいな。こうだったかな？」と思い、辞書で調べたらやっぱり違っていたという経験があるはず。正しい漢字が思い出せなくても、「何だか変だな」ということは自覚できるので、辞書の助けを借りて正しい漢字が書ける。エスペラントでも、「何だ

か変だな」とわかるようになるまでには、一定の読書量が必要だ。

たくさん読んでいれば、単語の知識は自然についてくる。重要な単語ほど出会う頻度が高いし、10回も20回も出会った単語は忘れない。「mi」や「estas」を忘れる人がいないのは、目や耳に触れる頻度の高さによると思う。ならば、他の単語だって、何度も出会えばおぼえられるはずだ。

川越 幹 さん

今後とも永続するが、実用にはならない言語であり、一種のオタクの集団と思うことと、年齢柄こんを詰めて勉強や研究もしていません。しかしながらザメンホフの偉大さには心底敬服できるものがあり、また、語学の参考のためライフワークとして、常にエスペラントに接していることを心掛けています。そこで実行内容を箇条書きにすると以下のとおりです。

1. 日常、外出するとき必ず入門書を携行し、喫茶店等休憩等するとき目にする。
2. 毎週、毎月の諸メディアの作文の課題には、必ず投稿して評価をうける。
3. 不定期であるが、海外文通を実施している。
4. 毎週の例会に出席する。
5. その他、他人への普及を心掛ける。

Esperanto daŭras eterne. Sed la lingvo ne estos uzata praktike en komuna socio. Mi pensas ke ĉi tio estas ia “Otaku”-fenomeno en la mondo. Sed tamen, mi estimas la grandecon de Zamenhof ekstreme. Por tio, mi tenas ĉion en mia koro kio min tuŝas ĉiam pri Esperanto. Do mi prezentas miajn praktikojn per paragrafoj skribitaj jene.

1. Kiam mi eliras, mi havas la gvidlibron de Esperanto ĉiam, kaj mi tuŝas la libron en kafejoj ktp.
2. Mi kontribuas la frazfaradojn de Esperanto al diversaj lernejoj en ĉiu monato kaj ĉiu semajno. Kaj mi ricevas poentadon de taksado.
3. Mi korespondas kun fremdlanda amiko, sed en nekonstanteco.
4. Mi partoprenas regulan kunsidon ĉiusemajne.
5. En ĉiu okazo mi tenas en mia koro la propagandemon pri Esperanto.

森川 和徳 さん

(1) 例会に出ること

まずは、京都エスペラント会の水曜日の例会に出ることです。

田平さん、相川さん、山本さんがエスペラントで話そうと例会を引っ張っておられ、エスペラントが日本語よりも多いのは素晴らしいことです。たぶん、他のエスペラント会の例会では、エスペラントが一部で、日本語が大部分ではないでしょうか。

というわけで、初心者に立ち戻り、辞書を引いて、例会で勉強しております。

(2) 専門分野の発表

本誌 5 ページのとおり、小大学などにて専門的な技術的な発表を行っています。

電子機器の設計や評価などを行っており、電子工学の技術者として、電気関係の内容をエスペラントで発表しています。2003 年から行っており、この発表により単語力と発表力が少しでもついたかと思えます。

専門用語のエスペラント訳やその説明を行うのに最も参考にしているのは、インターネットのエスペラント百科事典 [Wikipedio \(eo.wikipedia.org\)](http://eo.wikipedia.org) です。例えば、電気関係の用語 *elektro* (電気) や *duonkonduktaĵo* (半導体) が詳しい説明付きで載っているのは大変参考になります。

後藤 美和 さん

家にいると、やれご飯だ、やれきょうだいゲンカだとガタガタしているうちに日が暮れて、エスペラントの時間ってなかなか作れません。でもこれって言い訳...本当にやりたいことなら、寝る間を惜しんでもやりますものね！

意志の弱い私の、今していることといえば...

学習の場に、あえて出て行く

日常の雑事と離れた場所で、時間を決めて、というのが良いようです。「仲間」とのおしゃべりも楽しいですし

とはいえ例会は夜で出にくいし、土日もそれなりに家族の用事があったりして...というドブプリ主婦な私には、平日昼間が便利。そこで子連れでも参加できる勉強会を、毎週月曜午前、エスペラント会館でやっています。名づけて「子連れ学習会」(そのまんま)！ もちろん子連れでなくても大歓迎ですよ。参加メンバーの顔ぶれによって勉強材料も変えてしまうような、ゆるーい会です。それでも、一人だと本も開かない

私には、絶好のペースメーカーになっています。常連の光川澄子さん、西千寿子さんには、子守も含めて大変お世話になっています!!

そしてこの夏からもう一つ。藤本達生・ますみご夫妻と、音読&質問で勉強する贅沢な会、その名も"Rondo Duopo"! 準備次第でいかようにも濃密に学べる環境なのですが、さて私のような予習・復習をサボる生徒でもついていけるか!? 実は明日、その会があるのですが、予習がまだ...焦ります!!

好きなテーマの機関誌だけでも読む

分厚い本はついツンドクしてしまうのですが、薄い機関誌や雑誌なら。とりわけ隅々まで読むのは"La Japana Budhano"日本仏教エスペ란チスト連盟の機関誌です。私、3年前に初期仏教(お釈迦様の生きていた時代の、古い教え)に出会って、人生変わるほど魅了されました(え、全然変わってないじゃない!?)。その後、この連盟のことを知って入会したのですが、機関誌がまた面白い! 京都エス会にも届いているので、エスペラント会館にいらした折に、バックナンバーをご覧になりませんか?

いつの日か初期仏教の面白~い法話を、エスペラントに訳すことができればいいなあと夢見ています。

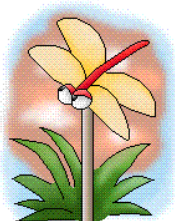
強いてでも作文する

恥ずかしいというか申し訳ないというか、今一番自分にとって「学習法」になっているのは、La Movadoの隔月の原稿なのです。Kajero Libervolaの欄を宮本聖子さんのアトガマで書いているのですが、私の場合、内実はお題自由の作文教室...小西岳編集長はじめ、峰芳隆さん、相川節子さんといったソウソウたる方々に添削していただいて、身の縮む思いで頑張っています。「いかに書けないか」が身に染みて分かり、激しく勉強になります。

大切なのはまず「伝えたい内容」を持ち、煮詰めること。その上で、それを伝えられるだけの語学力をつける...学生時代に参加した、田平正子さんの中級会話教室で、伝えたい材料をあらかじめ作文して参加することが課題だったことの意味が、今頃になって分かります。ああ当時は時間があつたのに、語るテーマがなかった...

まあ、ないものを挙げればキリがないですよネ。今できることをしま~す。

(終)



Libelo

ABZ kiel gastigi (2)

TAHIRA Masako

(A') = aldono al (A)

Atenton! Temas pri la TTT-ejo de "Pasporta Servo". Antaŭe ĝi estis

<http://www.tejo.org/eo/ps>

sed nun

<http://www.pasportaservo.org/>

(Ĉ) Kion diri unue?

Finfine gasto venas miahejmen. Kion mi diras al gasto en la komenco? Ofte mankas tempo al gasto telefoni al sia familio. Mi diras al gasto, ke li/ŝi rajtas internacie telefoni por informi la familion kiel li/ŝi fartas, por trankviligi la familianojn.

Malmodestaj gastoj senĝene uzas telefonon, sed modestaj gastoj respondas, ke ili eksterhejme el publika telefonejo telefonos, ĉar internacia telefono kostas multe. Mi diras al ili, ke ne gravas kiom kosti. Krome lastatempe mankas publika telefonejo surstrate dank' al multiĝo de poŝtelefono.

(D) Kion diri due?

Temas pri la uzo de komputilo por retumi. Vojaĝanto ne ĉiam havas ŝancon viziti interretejon. Tial mi tuj diras, ke gasto rajtas uzi mian komputilon.

Mi aŭdas, ke iuj malmodestaj gastoj tro longe okupas komputilon, tiel ke gastigantoj mem ne povas uzi. Ĉe mi ĉiuj gastoj estas modestaj kaj scias, ke mi bezonas retumi matene, tage, vespere kaj nokte por esperantaj kaj aliaj aferoj.

前号の訂正

本誌前号(97号)11~13ページの本連載記事のタイトルが間違っていました。

下記のとおり訂正するとともにお詫びします。

[Al Vi Kara 編集部]

(誤) AVZ kiel gastigi

(正) ABZ kiel gastigi

Iuj gastoj mem portas sian komputilon. Sed ili bezonas senfadenan ligilon al interreto. Mi aĉetis la ligilon, kiu staras apud mia komputilo. Tre forta radioondo atingas eĉ vertikalen. Gasto loĝas en la supra etaĝo kaj senĝene povas retumi. Se gasto volas presi ion, li/ŝi sendas al mia retadreso peton "Bonvolu presi la aldonan dosieron!" kiam gasto supre kaj mi malsupre samtempe retumas. Mi tuj respondas al la retadreso de gasto, "Jen presite!" anstataŭ voĉe kribi el la malsupro al la supro.

(E) Kion diri trie?

La alia bezono estas lavi malpurajn vestojn. Vojaĝanto kun multe da malpuraj vestoj en valizo ne havas tempon lavi kaj sekigi ilin. Se gasto loĝas nur unu nokton ĉe mi, mi rezignas diri, sed se la loĝado daŭras pli ol du noktoj, mi ordonas al gasto doni al mi lavendajn vestojn, ĉar mi tuj lavos kaj ili baldaŭ sekiĝos.

Iuj gastoj hontas doni al mi kalsonojn. Mi diras, "Ne hezitu, ĉar ĉion kune lavas lavmaŝino." Gastoj dankas min. Sed por gladi mi ne havas tempon, tial mi donas gladilon al gasto. Foje vestoj havas truetojn post longa uzado. Mi tre ŝatas flicki truetojn, eĉ se mi bezonas longan tempon. Gastoj tre dankas min. Ne dankindas.

(F) Kiel dormigi gaston?

Ne temas pri lulkanto, kun kiu dormu gasto. Foje duopo aŭ triopo venas. Ĝisnuna maksimumo estis sepopo. En gastĉambro estas unu lito kaj du matracoj. Tial tri samtempe povas dormi.

Kiam venas viro kun virino, problemas, se ili ne estas geedzoj. Mi demandas ne al viro, sed al virino, ĉu ŝi volas dormi kun li en la sama ĉambro aŭ ne. Se ŝi diras jes, mi lasas ilin en la sama ĉambro. Se ne, mi devas respekti privatecon en apartaj ĉambroj. Apuda ĉambro estas malorda librejo de mia edzo. Mankas spaco dormi. Mi rapide forigas la librojn kaj apenaŭ faras spacon dormi. Iam venis tri viroj, el kiuj du estas samseksemuloj. Tion mi poste eksciis. Ili devis triope dormi en mallibereco.

Kiel mi traktis, kiam la sepopo venis? Inter la sep estis ĵus geedziĝinta paro. Ilin kune kun aliaj dormigi en la sama ĉambro kompatindas. La dormĉambro de mi kaj la edzo estis servata al la dolĉa paro, dum ni geedzoj dormis sur koridoro sen litaĵoj, ĉar absolute mankis litaĵoj por sep gastoj. Feliĉe estis somero, kiam ne necesas multe da litaĵoj.

Iuj maljunuloj nokte malfacilas malsupreniri al la necesejo en la malsupra etaĝo el la supra etaĝo tra mallarĝa ŝtuparo en mallumo. Mi aĉetis porteblan urin/fekejon por la supra etaĝo.

Iuj homoj soifas nokte. Sed ili hezitas malsupreniri al la fridujo en la kuirejo, en kiu troviĝas trinkaĵoj. Al ili mi donas botelon da akvo aŭ teo antaŭ ol diri "Bonan nokton". Ili trankviliĝas.

(G) Se venos tertremo?

Se eventuale okazos tertremo? Nia luata domo estas malnova kun 100 jaroj da historio kaj el ligno. Kunloĝas tro multe da libroj. Se la domo tremos, libroŝrankoj mortigos aŭ vundos homojn pro pezeco.

Tial apud kapkuseno sur la lito en la gastĉambro mi metas kaskon, por ke en eventualo gasto protektu almenaŭ sian kapon per kasko. Feliĉe ĝis nun ne okazis grandaj tertremoj, kiam gasto kunestis.

(Ĝ) Kiel manĝigi gaston?

Mi ne estas vegetarano, sed fleksebla vegetare kaj malvegetare. Lastatempe kreskas vegetaranoj inter gastoj. Inter vegetaranoj ekzistas diversaj tipoj. Veganoj ne manĝas viandon, fiŝon, ovon, fromaĝon, lakton. Iuj vegetaranoj manĝas escepte de viando. Aliaj vegetaranoj manĝas escepte de viando kaj fiŝo. La triaj vegetaranoj manĝas fromaĝon, sed ne ovon.

Kiam vegetaranoj kaj malvegetaranoj samtempe venas, mi kuiras komunan kaserolaĵon kun viandoj, fiŝoj, salikokoj, legomoj, por ke ambaŭ anoj laŭ sia plaĉo prenu el la kaserolo. Sed se vegano miksiĝas, mi fritas Tenpuron kun faruno sen ovo. Jen salikokoj, fiŝpastaĵoj, multe da legomoj kiel fungo, lotusrizomo, kukurbo, karoto, melongeno, batato, zingibro, dolĉa kapsiko, bambuido, perilo ktp. Veganoj ricevu nur la legomojn kun salo anstataŭ supeto, aliaj ricevu ankaŭ la maraĵojn kun bonitosupeto.

Kiam gastas striktaj islamanoj (senporke), hinduoj (senbove), ne estas problemo, sed por judoj (koŝere), mi ne scias kiel kuiri viandon koŝere, tial mi lernos, kiel.

(daŭrigota)

(要約は23ページ下をご覧ください)

私とモンブランの万年筆

光川 澄子

私はモンブランの、何のかがりもない黒い軸の万年筆を、久しく愛用しています。私がこのモンブランの万年筆を手にするようになりしたのは、今から数十年前のある女の先生との出会いからでした。

その先生は、こどもがお世話になった幼稚園の教諭責任者で、その優れた指導力は伝統あるキリスト教幼稚園の名とともに、園外にも知られていました。

私がこの幼稚園に子どもを通わせたいと思いましたが、我が子をといひますより、私自身のこの園への憧憬が大ききはたらいていた、といった方が正しいかもしれません。

と言いますのも、戦前に建てられたこの園の講堂の、一抱えもありそうな太い木の柱や、ステンドグラスに囲まれたこじんまりとした清楚な礼拝堂など、何人も包み込んでくれるような雰囲気を感じられたからです。

さいわい我が子の入園がゆるされ、今度は先に触れた先生が連絡帳に書いてくださる文字に、私は魅せられました。その文字はお習字のお手本のようなものではなく、まるやかなぬくもりのある、血の通ったとでもいうのでしょうか。厳しさもあるこの先生の手から、どうしてこのような文字がと、不思議にもおもわれました。

ある日、私が何かの用事で先生のお部屋へうかがった時のこと、ドアを開けた瞬間先生の手のにぎられていた万年筆に、私の目は釘付けになりました。

私が見慣れていた女性用万年筆は、明るい色のものばかりですが、それは男性用ではないかとおもわれる重厚感のある、真っ黒の万年筆だったのです。キャップのあたりに描かれた、先のまるい雪の結晶のような白いマークも、今まで見たことがありません。

その真っ黒い万年筆の、金色のペン先から出るインクはよどみなく、まるやかなあたたかい文字となっていくのです。

長年使っていた万年筆がいたみ、そろそろ新しい万年筆を買わなければと思っていた時でもありましたから、迷わず先生と同じこの黒い万年筆を買うことに決めました。これには、この万年筆なら当然先生のような文字が書けるような錯覚もてつだっていました。

会社名も知らずにとびこんだ河原町通りの「丸善」でしたが、一階の万年筆売りのケースでキャップの白いマークはすぐみつき、それはドイツ製で、名は「モンブラン」だと、はじめて知りました。

この後どれほどの歳月が過ぎたでしょうか、<モンブラン>とは、エスペラントでは <Monto Blanka> だと知って、一層この万年筆がいとおしくなりました。

今までに2度、軸の一部がひび割れましたが修理でよみがえり、今に至っています。

先日、四条通りで<モンブラン>の大きな看板を見つけ、私には不似合いな高級感あふれる店ですのに、おもわず吸い込まれるように入ってしまった。値札に並んでいる数字もみな私には縁遠いものばかり。昔私が買った時も私には分にすぎた値段だったはずですが、ためらうことなく買ったのは、多分ボールペンの苦手なわたしを、天がゆるしてくださったのではと、今は河原町通りから姿を消した「丸善」とともになつかしく思い出した一時でした。

追記

数ヶ月前、かの著名なアメリカ人建築家・ウィリアム・メレル・ヴォーリズ氏(1880-1964)の足跡が、朝日新聞2ページ見開き両面いっぱい大きく紹介されました。ここに、今も多く残っている氏の建造物の中のいくつかの写真があり、その中に子どもがお世話になった幼稚園の写真を見つけた私は、大変な驚きとともにあらためて深くうなずかされました。



Fontoplumo

ABZ kiel gastigi (2) (19~21 ページ) の要約

「客の受入れ A B Z」 (2) 田平正子

(A') Pasporta Servo ホームページ変更

(Ĉ) 家族に電話せよ

(D) パソコンをどうぞ

(E) 洗濯物を出せ

(F) 寝せ方あれこれ

(G) 地震が来たら？

(Ĝ) 料理はどうする？

パソコンソフト「パワーポイント」を使った教材を紹介します

相川 節子

パワーポイントは、プレゼンテーションソフトのひとつで、OHPシートやスライドにあたるものをパソコンで作り、またそれを表示するソフトです。最近の学会や講演会は、パワーポイントなどで作った“スライド”をスクリーンに映写しながら演者が話をするのが普通になっています。先日の関西エスペラント大会でもいろいろな番組で登場しましたし、世界大会の講演も、ほとんどがパワーポイントで作った資料が使われているそうです。

パソコンで作った“スライド”は、従来のポジフィルムスライドとちがい、動きをつけることができます。文字が画面の外から飛び込んできたり、画面の中の絵が動いたりするのは。また音声ファイルや動画ファイルをはめ込むこともできます。単語や文を表示する画面に、それを読み上げる声や映像を添えることが可能ですし、BGMも流せます。

エスペラント講習会の教材をパワーポイントで作れば、文字だけでなく視覚にも聴覚にも訴えることができます。そういう教材を作っている人は世界のあちこちにおられると思いますが、そのひとりが、福島県の矢崎陽子さんです。

先日、矢崎さんをお願いして、その教材を送っていただきました。

入門講座の教材は、15回分の構成になっています。週に1回なら3ヶ月弱になりますね。初日は福島エスペラント会の紹介とエスペラントという言葉の概要、2回目は *estas* や *havas* を使った簡単な文というふうに進みます。15回を終える時には、エスペラントの文法がほぼわかり、簡単な日常会話も覚えられるようになっています。



教材の一コマをここにお見せします。(前ページ)画面では、まず、右のイラストだけが表示されます。次に講師がマウスでクリックすると、「Mi legas libron. 本を読んでいます」という文字が現れます。次にクリックすると、2番目の文が表示されます。さらにクリックすると3番目の文が... というわけです。

つまり、まず絵を見せておいて、講師と受講生が何かやりとりをしたあと、最初の文を表示する。さらに講師が説明したあとで、おもむろに2番目の文を表示するというようなやりかたが可能です。講師の腕しだいで、受講生を飽きさせずに、エスペラントの文法の合理的な面を説明することができます。

副教材として、練習問題が用意されているのも、この教材の利点です。

眺めているだけでも十分楽しい教材ですが、矢崎さんは古いエスペランティストを楽しませるためではなくて、入門講習に役立てるために、手間と時間をかけてこの教材を作成されたはずです。豊中エスペラント会では、最初の福島エスペラント会の説明の部分だけを豊中仕様に変えて、この教材を使ったそうです。そのうち、京都でも使わせていただけたらなと思っています。

矢崎さんからいただいた教材には、入門講習用のほかに、ある程度学習した人のための「疑問詞まとめ」「前置詞まとめ」というファイルもあります。これはわたしたちの例会ですぐにでも使えるのではないかと思います。「前置詞まとめ」の一コマをご紹介します。カラーでお見せできないのが残念！



矢崎さんの教材を見たい方は、京都のエスペラント会館(075-343-3120)の相川までご連絡ください。メールアドレスは setuko@s8.dion.ne.jp です。

Long-distanca ir-vojo al la 94-a UK okazinta en Bjalistoko

山本 鳩江 (Yamamoto Nihoe)

Tie en Bjalistoko, la naskiĝloko de la kreinto de nia lingvo, Ludoviko Lazaro Zamenhof, okazis la kongreso jubileanta la 150-an datrevenon de la naskiĝo de la lasta.

Mia vojaĝo al la provinca urbo, Bjalistoko, estis sinsekve en apenaŭaj bonordoj. Unu tagon antaŭ la ekvojaĝo mi ne bone konstatis la deteriaĝhoron de la rezervita aviadil-seĝo pro la malkonfirmema karaktero de mi. Unuafoje je la deir-mateno mi sciis ke mi estis miskonfirmanta la deteriaĝhoron de la aviadilo pli malfrue 2 horojn ol la ĝustan. Se ne estus sciite, mi estus falinta en abismon, ke mi malsukcesus enveturiĝi en la aviadilo kaj perdis ĉian vojon. Tiel kaj iel mi estis en la flughaveno Kansai lunde, la 26-an de julio, konsiderinde frue unu horon ol la ordinara kazo. Procedante ĉe la ĝiketo de Finnair-firmao por ricevi la biletojn al Helsinko kaj plue al Varsovio mi aplombe alboridiĝis kaj alflugis al Finnlando.

Kaj la ir-flugado estis sen-probleme iranta. Reakirinte la akompane ŝarĝitan en la aviadilo valizon el multaj sur la rondiranta bendo, mi celis al la bushaltejo. Estis ekstere sufiĉe tag-lume spite de jam esti je la oka vespere pro la t.n proksimume blanka nokto.

Laŭpaŝe de la eliĝo el la flughaveno Okecie en Varsovio kompreneble antaŭ ĉio mi aĉetis bus-bileton en iu rimarkita kiosko, ĉar mi antaŭsciis ke sen-bileta veturo kaŭzos ĝenon, eĉ pekan rezulton devige pagendan punmonegon kaj plej baldaŭ post enbusiĝo oni devas bileton valide stampi en tiucela maŝino ĉemetita en buso. Tio iris bone. Mi trovis sidlokon el la malplenaj seĝoj. Supre de la pordo estis la skizo pri haltejoj laŭvojaj. Mi estis devanta elbusiĝi en la centra stacidomo de Varsovio, 9 minutojn piede de kie la rezervita ĉambro de la hotelo situas. Mi ne povas legi polajn literojn, plie neniel antaŭsciis la trafikajn sistemon.

Embarasite mi alparolis al iu bonkormiena junulo jene: mi intencas elbusiĝi antaŭ la centra stacidomo, kiel mi povus trovi la haltejon sur la skemo desegnita ?

ビャウイストク(ポーランド)の第94回世界エスペラント大会に参加された山本さんが日本から世界大会会場に到着するまでの苦労話。ビャウイストクへの行く方法、切符の日付の間違いなど、いろいろなことが起こりましたが、ポーランドの人々の親切で無事到着されました。そして、国際活動パネル展示会(10ページ参照)のために、世界大会の写真をたくさん撮影していただきました。 [AI Vi Kara 編集部]

Dank' al tiu junulo kaj la alia junulino (ankoraŭ plu demandis al la alia intelekto-belaspekta fraŭlino pri la konvena haltejo por la hotelo -Intercontinental-), mi kviete kaj streĉ-plene estis staranta antaŭ la centra stacidomo de Varsovio preskaŭ je la naŭa vespere en la sama tago kiam mi forflugis el Japanio.

Ankoraŭ ekstere estis hele kiel ankoraŭ vespera krepusko en Japanio. Mi spiris fremdan aeron en Pollando kvazaŭ kiel la populara akt-ludanto de filmo. Mi bonfavore unuarigarde trovis la reklam-literojn surmure ornamitaj de la supre menciita hotelo mult-etaĝa inter ĉirkaŭe starantaj konstruaĵoj. Ignorante alrigardantajn al mi de sur preter-vojo tie kaj ie friponemulojn, mi certigis loĝi unu nokton en la hotelo ĉe la fronta tablo.

La valizon forlasinte en la rezervita ĉambro, mi iris al la stacidomo por aĉeti la trajn-bileton al destinita Bjalistoko por la sekvanta mateno, por ke mi ne konsterniĝu pri la glata envagoniĝo pro la malmulta tempo. La daton kaj veturontan tempon dirante per la angla mi iel akiris la bileton ĉe la giĉeto de la stacio. La horaro de la trajnoj ne troviĝis ie ajn, tial mi sentis min maltrankvila. Kaj plue demandis pri la horaro al la stabanino de la giĉeto. Tamen unu la alia ne bone interkompreniĝis. Eble kulpe pro mia mallerta angla parolado kaj brua cirkonstanco. Cetere la ricevita bileto estis presata en tiu mendita tago .

Revenante la hotelon mi petis de la zorganto ĉe la fronta akceptejo ke mi dezirus scii la horaron de matene kurantaj trajnoj al Bjalistoko por atingi tien ĝis la naŭa matene. Li afable esploris publikigitan informon pri la trajn-horaro en la reta paĝaro, kaj baldaŭ du foliojn da horaro printis kaj donis al mi kun komplezema mieno. Mi elkore dankis al li por la kontenta rezulto.



Esperantaj flagoj estas troveblaj ĉie en Bjalistoko.

Sekvantan tagon matene tir-portante la pezan valizon mi leviĝis de sur la kajo en/elir-eskaleton de la vagono "la dua klaso" al ravita Bjalistoko. Laŭ la relvojo etendiĝis la intimaj pejzaĝoj je da longe daŭrantaj pinarbaroj kaj betularboj sur la sableca tero kaj bovoj kaj ĉevaloj en paŝtejoj. Kaj tiel ĝuante plezurigajn scenojn ekstere tra la fenestro, mi sekvis certigi tempon. Tra la vagonaro gardisto venis kontroli la bileton. Mi montris la mian kaj mi estis riproĉata pro la jam pasinta dato de la bileto. Mi persistis min senkulpa, tial ĉar mi intencis aĉeti ĝin laŭ mia klopodo, sed tamen la bileto-vendistino erare presis la daton en la lasta tago. Poste kun bonveniga mieno tiu gardisto ne preterlasinte la maljustan bileton lasis min senkulpa kaj senproblema. Kaj li foriris de mi. Tamen poste kontrolisto alternis survoje al Bjalistoko kaj la nova ankoraŭfoje pli severe observis la bileton kaj subpreme kondamnis, kaj en des pli forta tono mi klarigis al tiu la situacion por sinpravigi min. Li unufojon reiris por konsulti kun la aliaj aŭ altrangaj kolegoj kaj revenis diri al mi, ke mi povas veturi per tiu bileto kaj mi plu vojaĝis en la trajno tute serene.

Miaj ĉirkaŭsidantoj en la ŝel-ĉambro de la vagono unu post alia celis al la elir-pordoj, kaj mi rimarkis, ke mi alvenis al la cel-loko kaj malsuprenirinte trajnŝtuparon mi estis staranta sur la kajo de la stacio Bjalistoko, kion mi konfirmis per multe da flagoj kun la verda stelo metita ĉe ĉiu fosto sur la kajo. Per tio mia malkonfidema vojaĝ-okazaĵo ĉesis okazi al mi.

Kvazaŭ kompensi ĝistiamajn malordajn aferojn por mi, post la surteriĝo en Bjalistoko, sinsekve akompanis min ne-kredeble danke-favoraj aferoj. Kiam mi instinkte disatentis mian senson orientiĝi en la stacidomo, iu ne juna Esperantistino el Belorusio ŝarĝanta ĉe sia ŝultro la ĉi-foje distribuitan kongresan sakon konsile direktis min pri la ir-vojo al la kongresejo en nia lingvo. Kaj ŝi baldaŭ deiĝis de mi



Ceremonioj en la UK okazis en granda tendo.

turnante sin al la returna direkto. Ŝi admonis min ke mi prenu la buson al la kongresejo.

Kaj mi per la helpo de ŝia komplezo daŭre marŝis al la ŝajne aspektanta loko kiel la bus-atendejo. Ankaŭ ĉi-okaze min okupis aĉeti la bileton, tial mi eniris en iu butikon interne de kiu estis la kestoj da cigaredoj, tiel trovinte tiun butikon kiosko. Ĝia mastrino apenaŭ kaptinte mian parolo-enhavon kuntiris min eksteren kvazaŭ kiel ŝi kondukus min al la bus-atendejo en la roteria placo samtempe serurante pordon fermita. Mia konjekto estis prava. Ŝi laŭte petis de geatendantoj amase starantaj sur la bus-kajo, ke bonvolu zorgi tiun japanon veturi en la buso haltonta ĉe la haltejo oportuna al la politeknika universitato (la kongresejo), se iu estus samdirekte tien (en la atmosfero interparolita mi bone divenis), iu bonhumora dommastrino kandidatiĝis akcepti ŝian peton kaj gestis al mi per mano kaj kun mieno trankviliga. Kaj ĵus apude estis la kiosko, mi tuj atendis mian vicon aĉeti bileton. Sed venis la buso veturenda. Tial la akompanantino - zorgantino signis kaj alvokis min en la hastema tono.

Mi perdis stabilan humoron kaj ĉagrenite nenion taŭgan pripensis. Tiam iu junulo staranta malantaŭ mia vico transdonis sian posedatan bileton al mi kaj neniigante postuli monon.

Kun dank-larmoj por tiu afableco mi estis regalata veturi en la buson. En la buso tiu vetur-gvidantino nomita de la vendejo-mastrino ĉiam zorgis min per la okul-signoj ĝis la cel-haltejo. Kaj mi surteriĝis sur la trotuaro proksima al la kongres-loko : la politeknika universitato de Bjalistoko. Post ankoraŭ de ŝia akompanado mi klinis mian kapon al ŝi kaj diŝiĝis de ŝi antaŭ iu pordego de la universitato. Pro la helpoj kaj komplezoj de renkontitaj poloj mi venis al la kongresejo. La tempo estis jam ĉirkaŭ la deka matene, ĵus paŭza intertempo inter la programeroj. Tial antaŭ la giĉeto kaj la loĝejo-servo mi estis metita en la atendo-vico. Tiel mia partopreno en la UK en memorenda Bjalistoko komenciĝis. Poste en la alia okazo mi skribus la kontinuan rakonton kiu sekvas la suprajn.

la lastan tagon de aŭgusto



Indikilo montras
la straton de Zamenhof

La reviviĝo de aŭto “DETROIT”

•••• en la alta tekniko en Kioto

KAWAGOE Kan

Lastatempe elektra aŭtomobilo multiĝas iom post iom en la mondo por ŝpari naturan propran energion.

Probable oni sentas strange ke unue inventita aŭtomobilo estis ne uzanta benzinan maŝinon. Tio estis elektra aŭtomobilo.

Dank’ al la invento de elektra baterio de sciencisto Volta en 1799, elektra aŭtomobilo estis produktita.

Supre nomata temo “DETROIT”-aŭtomobilo (Usona) estis importita en 1917 per la fama kompanio Simadzu Seisakuŝo en Kioto.

La unua prezidanto Simadzu Genzo uzis la aŭtomobilon ekipitan per lia “GS baterio”, por vizitadi kompanion kaj sian domon dum ĉirkaŭ 30 jaroj.

La tegmento de la aŭtomobilo estis simila al “Cilindra ĉapelo” (Silka ĉapelo). Do, la urbanoj de Kioto amis la ĉarman kaj interesan figuron. Mi mem memoris klare la amindan aŭtomobilon en mia infaneco.

Verdire, post la milito de Japanio, benzino estis tre malsufiĉa. Do elektro estis uzita en multe da trafikaj transportoj; ekzemple, taksioj kaj aŭtobusoj. Plie, eĉ ligna karbo kaj brulligno estis uzataj por la energioj de aŭtomobiloj.

En nuna tendenco de energio-ŝparado, oni volis revivigi la elektran aŭtomobilon “DETROIT” konservita en la kompanio de Simadzu. Post multaj klopodoj, finfine, la reviviĝo de la aŭtomobilo estis elfarita en la 20a de majo, 2009.

Pro tio la tago estis decidita kiel “la tago de elektra aŭtomobilo” de la Asocio por datreveno.

Ĉi tiu agado prezentas la intencon de alta tekniko “HAITEKU” (japana) de Kioto-urbaroj, mi pensas.

La elektra aŭto
“DETROIT”
en GS-Yuasa
kompanio

(株)ジーエス・ユアサ
コーポレーション





La supra foto montras parton de la ĝardeno de Taizoojin (退蔵院), unu el la multaj temploj en la templo Mjooŝinĵi (妙心寺), en la urbo Kioto. Ĝi esprimas la mondon de IDEOJ, kaj blankaj sabloj montras marfluojn kun ondoj. Mi esperas ke ili estas ankaŭ ondoj de Esperanto. (KAWAGOE Kan)

Al Vi Kara N-ro 98, eldonita en la 23a de septembro, 2009

京都エスペラント会 Kioto-Esperanto-Societo

事務局

〒600-8455 京都市下京区西洞院五条上る八幡町 537-6 エスペラント会館

電話・FAX : 075-958-2475 (川越 幹)

ブログ : http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/

電子メール : esperanto_kioto@yahoo.co.jp

会費 : 正会員 年 7,200 円 準会員 年 3,600 円

Al Vi Kara 購読費 年 1,000 円

ゆうちょ銀行(郵便)振替口座 : 01000-4-9895 口座名 : 京都エスペラント会

Al Vi Kara 編集局

連絡先 : 〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町尻江 13-8 森川和徳

電子メール : kz_morikawa@yahoo.co.jp

ファックス : 075-955-1627

本誌 PDF ファイル保管 : <http://cid-843fe5eeb586235d.skydrive.live.com/summary.aspx>